

心理的距離の照合モデル

山根 一郎*

Matching Model of Psychological Distances.

Ichiro YAMANE

1. 問題

1.1. 心理的距離モデルの進展

対人心理的距離感（以下、心理的距離あるいは距離）の体験構造を示した筆者のモデルは、ひじょうに遅々としたペースながら構築が進展してきた（山根, 1987b, 1995, 2005）。このモデルの特徴は、距離空間に2次元性を想定している点と、自他間の距離の不一致の認知を組み入れている点にある。そして心理的距離という現象を、対人関係の様態を表現する1つ（1変数）としてではなく、関係性（関係であること）そのものを表現する基盤的な体験とする点にある。この視点から、通常心理学的研究とは逆方向の深層化、すなわち、距離体験の存在論的次元の探究が優先されてきた。存在論的次元とは、心理的距離を自己と他者の存在にかかわる現象、すなわち、自己にとっての他者という存在（関係存在としての他者）の意味、他者とかわっている自己の存在（関係存在としての自己）の意味にかかわる現象、すなわち、存在の意味＝関係の様態とする次元である。

心理的距離が関係性そのものの現象であるとは、他者に対する感情や行動のような関係の具体的様態を可能にする基盤を意味し、自他の「存在の間隙」を意味している（山根, 2012）。その間隙とは、1つの視点では、自己と他者との間に置かれた、他者の非自己性（自己の非他性）を痛感させる“隔絶性”である。もう1つの視点は、他者なしには自己はありえない、自己は他者によって社会的に形成されるとする自己と他者との“共存性（われわれ）性”である。それぞれ幾分かの実態を含んだこの相反する視点を総合し、それらの視点を両極におけば、自己と他者との間隙は、乗り越えられない隔壁という定性的なものではなく、その両極を埋める伸縮可能な“間”として捉えることが可能となる。いうなれば、自己と他者との関係性とは、隔絶性と共存性という排反的な両契機を内包した、矛盾（ジレンマ）を孕んだ存在様態であり、その両契機の混合度合いの量的実感として、“距離”という定量的間隙性が体験されていると想定する。いいかえれば、自他間に開かれる心理的距離は、自己の孤絶と喪失の双方を回避する、他者との存在論的バッファ（余裕）である。距離（バッファ）を維持することが、自己を自己たらしめ、他者を他者たらしめる。そのバッファは、自己を起点とし、特定の他者を終点とする有限な間隙として体験される。その間隙を満たしているものは、自己と他者との存在(≠

*心理学科 教授

存在者)としての差異性である。そしてその間隙は固定的なものではなく、他者によって、また同じ他者でも関係の変化によって柔軟に伸縮するものとして、定量的な“距離”という空間感覚に合致するのである。

ただし、心理的距離は、数学的距離とは「非類似度」(差異性)という基本的意味は共通するものの、数学的な距離の3つの公理のうち、「非負性」は満たすが、「対称性」と「三角不等式」は満たさない(山根, 2012)。特に対称性を満たさないことは、自己から他者への距離と他者から自己への(認知された)距離とが常には等しくないということであり、これこそ関係性としての心理的距離の特徴として見逃すわけにはいかない。

このような存在論的視点に立つ本モデルは、対人関係の基盤現象としての心理的距離によって関係の生々しい様態を構造的に記述することを目指している。そのため、距離を可能な限り単純化するのではなく、むしろ結果から原因を探る逆問題的アプローチとして、距離の体験構造を概念的に分節化し、また体験場の多様性を示し、さらに距離の変動をもたらす諸要因(力)を考察し、距離体験のダイナミクスを立体的・時間的に描写することをめざした(山根, 2013)。

1.2. 構造からシステムへ

このように距離体験の諸要素を抽出し構造化する作業は、現象学的視点でいえば、前提・自明視されていた次元を掘り起こし、より現象の根源に遡るという背進的な方向への深化である。この作業は深みのない理論ばかりの社会心理学において特に必要であると確信しているが、その一方で、概念モデルが現実的作動をどこまでリアルに説明できるかという検証(前進的な方向)を怠っては、諸現象を後付け的に説明しているだけの神話的言説にとどまってしまう。

そこで、概念モデルが一通りまとまったなら、距離という体験を構成する静的な構造モデルから、特定の距離値(数値的に同定できる可能性は低いので距離値ではなく距離値と表現する)が体験される過程としての動的なシステムモデル、すなわち具体的な距離値の体験モデルへの前進を試みるべきである。

その第一歩として、まずは、能動表象(的距離)がどのように体験されているかを問題にした(山根, 2015)。そこでは、特定の他者への想起された心理的距離(能動表象)を、数直線で示した距離尺度で評定させ、そこに至る判断過程を自由記述させた。その結果、その評定がいかなる他者表象に基づいてなされたかは容易に回答できたが、その表象内容が特定の距離評定値に変換される心的過程は当事者にとっても回答困難であることが示された。そして、回答者の素朴な反省によれば、距離評定の回答において、距離が直接表象されるのではなく、距離対象である他者の視覚像(受動表出)やその他者とのコミュニケーション経験がまず表象(想起)された。そして質問で導かれた現象学的反省過程によって、それらの表象に随伴する触覚的情感が距離評定の根拠にされたことがわかった。

この流れを進めて、本稿では心理的距離は何にもとづいて特定の距離値として経験されるのかという心理的距離値の照合モデルを構築していく。ただしそれは、第3者の視点で構成される“客観的”な心理的距離尺度の類いではなく、あくまでも本人が特定の距離として感じる過程の再構成でなくてはならない。

2. モデルの要素の整理

本章では距離値の照合という視点からモデルの構成要素を整理してみる。いままで別個に論

じられてきた距離の意味構造、距離の体験場、距離を変化される要因を、上述の目的から整理することによって、新たな視点が発掘されることを期待する。

2.1. 距離の2次元性

まず、「心理的距離」は距離感であることを忘れてはならない。すなわち心理的距離は客観的に存在する空間ではなく、個人の主観的な経験状態である。

a) 距離の意味空間

心理的距離は自己にとっての他者経験である。他者経験は、上述したように他者の他性と自己への同一性という両端の間に開かれる心的空間での経験であるが、その両端を両立不能な1次元空間（＝距離）の両端ではなく、両立可能な2次元空間とみなした。それは物理空間的距離の認知が距離対象の認知とともに距離対象との隔たりの認知からなるという視覚体験の2次元性に対応させている。すなわち、1つは他者の他者であることの経験の次元であり、もう1つは他者への自己としての経験の次元である。前者を「個別性」、後者を「共同性」とした（山根、1995）。それを式①で示す。

$$\text{心理的距離} = \text{個別性} + \text{共同性} \cdots \text{①}$$

ただし式の+は概念的並列を示すものであって、線形結合に限定するものではない。

個別性と共同性は、現象学的には距離感という意識現象のノエマ的側面とノエシスの側面に対応し、個別性（ノエマ的側面）は他者の現われ、共同性（ノエシスの側面）は、その他者に対する自己の在り様に相当する。前者は対象化された距離であり、意識対象として容易に表象されるが、後者は生きられている距離であるため、行動表出は容易であるが、意識対象化はかえって困難である。

心理的距離をこのように2次元として捉えることは、通常は1次元とされる距離概念を混乱させ、測定を複雑にするのも確かである。しかし、測定のための理論ではなく、心理現象の解明のための理論としては、心理的距離という他者経験を数学的（非対人的）な距離概念に引きずられることなく、あくまで心理的な距離感の記述としての視点を堅持したい。その意味では個別性は、距離到達点ではなく、対象となる他者固有の内実（情報）である。その内実性こそ、その他者の（他の他者でない）その他者たる所以である。そしてその内実性に対する自己側の心的反応すなわち共同性が狭義の心理的距離であり、その内実性が異なればその距離も異なる。この個別性と共同性の2次元化によって、関係性が本来的に抱える隔絶性と共存性のジレンマの様態をより詳細に表現できる。

b) 個別性と共同性との関係

距離が自己との“非類似性”であるという意味では数学的距離と同じであるが、心理的距離には“他者の心理量”という側面がある。すなわち他者の非類似度という1次元の体験ではなく、情報化（視覚）と実感（温感、触感的）という経験相が相異なる両契機からなる心的空間である。

また両者は経験のタイミングも異なる。まず個別性が経験され、しかる後に共同性が経験される。たとえば相手の趣味が自分と同じであることを知って距離が縮まったという経験は、個別性の経験（情報）によって共同性の経験（受容性）が作動したためである。また、知り合っていない距離の遠方域では個別性が主に経験され、よく知り合っている個別性が飽和に達した近接域では共同性が主に経験される。であるから、距離が遠い他者に対しては視覚的表象（個別

性)に依存し、近い他者には定常的な共在感(いつでも心の中にいる)があり、暖かい感性が併発される(山根, 2015)。

以上から、対象認知としての個別性は心理的距離を可能にする、そこから心理的距離が発生する先行領域であり、対象への距離感そのものとしての心理的距離は、共同性に限定できる。

c) 共同性という距離空間

これより心理的距離は“共同性の程度”とする。共同性とは、他者との一体感=自己の延長の程度であり、1次元尺度とみなせる。自己の延長といっても自己との同値・同質性という客観(存在者)的基準ではなく、むしろ自己にとっての受容性という主観的基準による。実際、自己と異なる属性をもつ他者を自我理想として同一化・同一視することがありうるし、また異性のパートナーや家族に対しての一体感も、性別や年齢という基本属性が異なっても可能である。

強く受容される他者は、存在の暖かみというような肯定的存在感が強いことを意味し、心の中に居る、いつも傍らにいるという内的な“近さ”の感覚を伴う。また、自己を相手に近づける同一化・同一視という状態も能動的な受容性の高まりとみなせる。

共同性が高い(大きい) = 距離が近い(小さい)ということであるから、距離0 = 共同性max, 距離max = 共同性0(ただしmaxは不定の最大値)の関係となり、共同性と距離とは逆数関係にある(②。ただし本文中では同義関係として扱う)。

$$\text{心理的距離} = 1 / \text{共同性} \cdots \text{②}$$

また、ともに最小値が0であることから共同性も距離と同じく比率尺度といえる。ただし距離の最小値0は自己自身であるから、他者が他者として取りうる値は >0 となる(他者が取りうる最小値の問題は、社会心理学というより自己心理学的問題になる)。一方最大値は、現実には、アカの他人が相当するが、一定以上の距離は値が不定となり、距離空間が無限の延長を持っているとはいえない。

われわれは他者との心理的距離を数値化できるほど精確には体験していないが、絶対原点を基準にして比率尺度的に感じていることはある程度想定できる。ただし、その距離感は、通常の距離すなわち1次元の距離空間=直線(原点から対象まで)を側面から見たものではなく、原点から対象に向った視野であり、距離が最大値に近づくほど空間は圧縮され、上述したように一定以上の距離はほとんど差が体験されないことになる。たとえば個別性がほとんど無い(個別の他者として特定できない)アカの他人Aとアカの他人Bとの共同性の差はほとんど生じえない(外見的魅力は発生しうる)。このような空間圧縮された距離が距離感の個々の空間(集合)であり、近い領域では差が拡大し、遠くなればなるほど差が圧縮されるといえる。ではそのような空間で特定の距離値が得られるには、共同性の感覚がどのように体験されるのか。一体感の感覚強度はどのように認識されるのか。

また比率尺度なら、単位距離とその倍数性が成立するが、距離0の原点から1だけ隔たった距離1(単位距離)というものを特別に意味ある共同性の経験として想定できるだろうか。さらに距離1の2倍の距離2を共同性の1/2の強度として想定できるだろうか。このように心理的距離を客観的に比率尺度化することは、かえって距離感体験の再現性を損なう可能性がある。

一体感の強度への接近のひとつの切り口として、比喩としてではない実際の触覚体験(空間的距離0)としての一体感との関係を問題にできる。これは表出行動としての身体接触・抱擁

が心理的距離に与える影響の問題である。すなわち距離の体験場としての表象と表出との関係を見る必要があるであり、2.2. で論じる。

d) 個別性尺度の役割

ところで、心理的距離の値が共同性の1次元に集約できるなら、個別性は不要となるのか。個別性は、距離の様態を側面から表現する役割を担える。すなわち、共同性・個別性とあえて2次元化することで、実現されている距離（共同性）の安定性、対人関係上での健全性が診断できる。たとえば個別性と共同性がバランスがとれている状態（このバランス基準はデータの蓄積によって経験的に確定される）は、安定している状態といえる。共同性に比べて個別性が高すぎる場合は、共同存在性が弱く、孤絶性が強いことを意味するので、関係としては不満が高い状態といえる。逆に共同性に比べて個別性が低すぎる場合は、共同存在性が強いわりには、相手に対する情報が少ない状態で、相手を正しく理解しておらず、一方的な思い込みが過ぎている状態と診断できる。

2.2. 表象距離と表出距離の対応

心理的距離（共同性）は対人場面のどこでどのように体験されるのか。その体験場を、能動と受動の2方向、表象と表出の2層、計4側面とした（図1、式③。山根、1987b）。

$$\text{心理的距離} = \text{能動表象} + \text{能動表出} + \text{受動表出} + \text{受動表象} \dots \text{③}$$

式③の右辺を「方向」でまとめると、

$$\text{能動}(\text{表象} + \text{表出}) + \text{受動}(\text{表象} + \text{表出}) \dots \text{③}'$$

同様に「層」でまとめると、

$$\text{表象}(\text{能動} + \text{受動}) + \text{表出}(\text{能動} + \text{受動}) \dots \text{③}''$$

と変形できる。

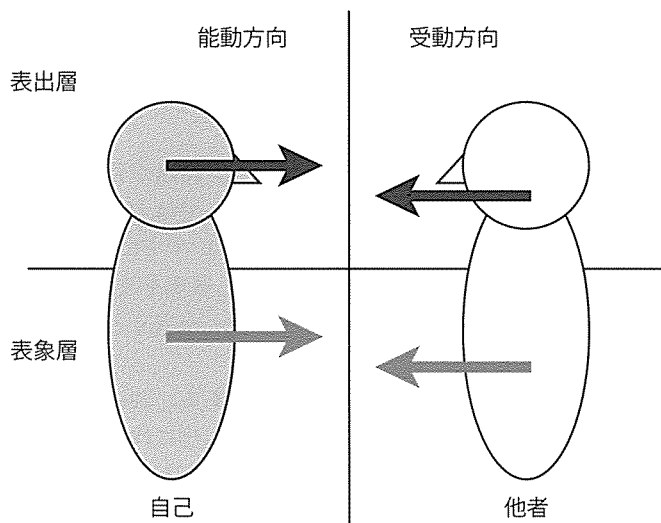


図1 心理的距離の体験構造

本モデルは、これらの4種の心理的距離が互いに照合可能である（値が異なりうる）ことが前提されている。たとえば、式③'は表象と表出の照合（ズレ）、式③''は能動と受動の照合（ミゾ）を表現している。③'の照合、すなわち表象と表出という層（体験様式）の異なる距離が照合可能であると前提されているため、本モデルは表象距離だけでなく表出距離の値の認知過程の説明も必要になる。③''の能動距離と受動距離の照合は、同じ体験層で方向が違うだけなので幾分容易であろう。これらの中で、直接照合されるのは能動表出と受動表出の対であることから（受動表象は受動表出から推定されるため）、表出距離の値は、能動・受動に共通していることが前提となる。そして、これらの照合可能性によって、能動表象と受動表出との照合（「不整合」）も可能となる。以上から、能動表象の値は表出距離との照合、すなわち同値（等距離）性を実現できることが条件となる。そこで表象距離と表出距離の関係を問題にする。

a) 表出の先行性

上の4側面のうち、心理的距離と概念的に最も近いのは能動表象（距離）である。だが、実際の対人場面では、表象よりも表出が先行することが多い。この世に誕生して、まずは親などの他者から幾度も受動表出という“距離づけられ”を体験し、その対応として事後に能動距離（距離づけ）が発生したといえる。すなわち、距離の初期経験は受動表出であり、そしてそれに対する能動側の対応も自覚的で（表象を経由し）ない能動表出（笑顔）であった。すなわち、われわれの距離経験は、内的表象よりも外的表出が先行していた。なぜなら、心理的距離を開示できる（人間を含む）動物には、自然的表出を受信する機能と送信する機能が遺伝的に備わっているからである（それゆえ距離の相互表出はヒトとイヌとのように、種を越えても可能となる）。

発達の起源だけでなく、個別の対人関係の経緯においても、初対面時には、表象距離（共同性）は不定（max）に遠い状態であるから、表象より表出が先行したはずである。しかもその場合の能動表出は無自覚であり、それが自覚される前に受動表出が体験される。表出のやりとりが記憶されて初めて表象の根拠となる。ただし、能動表象が特定の値を確定してからは、表出と表象の差（ズレ）を体験しうる。すなわち、表出の抑制や偽装が可能となる。とするなら、表出は必ずしも表象を経由しないし、必ずしも表象の表出でもない。ズレを体験しうる自覚的表象ではなく、表出に直結する自覚的でない表象こそ、表出に対応する意味としての共同性（距離）に相当するのではないか。この問題は新たに検討に値するため、章を改めて論じたい。

2.3. 距離の力学要因

その前に、距離を変化させる力についても整理していく。距離が特定の関係で特定の値をとるということは、距離が変化しうることを前提としている。ではどのような要因で変化するか。距離空間での距離を動かす力が問題になる。この力には、すでに「共在力」、「構造的力」、「魅力」（引力と斥力）が提出されている（山根、2013。ただし表現を改めた）。距離にかかわる力は、距離を変化させる力と変化に抵抗し現状を維持する力が考えられる。

a) 共在力

まず共同性に内在する力（変化の傾向）として共在力がある。共に在る時間の長さそれ自身が共同性を高める効果である。共在経験による共同性の安定化に作用し、一定の距離の近さを維持する力となる。たとえば、しばらく疎遠になっていた旧友との再開でも、過去に到達した共同性によって、それが復活できる。もちろん疎遠という距離の変化現象も共在力の停止による作用である。共在力は、今共に在る期間中に作用し、共同性を徐々に高める（距離を近づけ

る)方向に作用する。そして共在がない期間、共同性は徐々に低下する。共在力が作動する根拠は、共在中に表象・表出が活発化するためと思われる。逆に疎遠化によって、これらの距離体験の不在が共同性を下げることになる(個別性は低下しない)。

このように共在力は、共同性を高める力としては決して強くないが、いったん下った共同性を回復する復元力として潜在的な力をもっている。

b) 構造的力

対面関係が成立している時、共在力は背景化され、それより強い構造的力が作動する。すなわち表象と表出の2層、能動と受動の2方向がともに成立して、能動表象、能動表出、受動表出、受動表象の4側面がそれぞれ体験可能な時、それらの間に発生した距離の差(ズレ、ミゾ)を低減する力が働く。すなわち、自己内の表象と表出の不一致である「ズレ」は、自己表現のジレンマ(他者へ誤解を与える)を引き起すため、低減させる力が働く。そして自他の表出の不一致である「ミゾ」は、距離の相互性という心理的・社会的要請に反するため、こちらも低減させる力が働く。

また受動表出と能動表象との差である「不整合」は、個別性(相手の現れ)と自己側の共同性のアンバランスに相当し、自他間の距離の不一致が露呈された状態である。この状態に対する反応としての能動表出は、ズレとミゾの双方を低減する力にさらされながら、そのどちらか一方だけしか実現できない。すなわち高次のジレンマ状態である。このように構造的力は、4側面の距離の間に不一致が生じた時、そのどれかに他を一致させる力である。ということは、異なった側面での距離の値が互いに照合可能であることが前提されている。そこで問題になるのは、側面間の照合はいかにして可能かということである。これも章を改めて論じたい。

c) 魅力

距離を接近する動因として最も強い力は、他者が備えている魅力(負の魅力も含む)である。魅力は距離を変化させる最強の力といえるが、これは他者の内実に帰属し個別性にかかわる力である。具体的には身体的(美的、性的)魅力、社会的(財力、地位)魅力、性格の魅力などの“価値”の力である。このような属性的価値以外に、受容的応対(同意、支持)、気が合う、自我理想に近いなど共同性にかかわる魅力も存在する。ただし、魅力の強さは共同性という実現した距離感にとっては間接的な作用となる。そのためこの力は共同性の尺度そのものを構成するものではない。

これらの既述した力に加えて、以下の2つの力を追加したい。

d) 表象力

共在力の根拠に、共在中は表象・表出が活発になるためとある。それなら、表象だけが活発になっても距離は接近しうるのではないか。なぜなら表象が繰り返されると、それによって毎回喚起される共同性的な感情が強化されるためである。すなわち非対面時に表象が活発になれば、その間に距離は一方的に接近し、逆にその期間に表象がまったく無ければ、その間に距離は一方的に遠のくといえる。理屈上は表出が無い分共在力よりは弱い、非対面時にも心理的距離が接近しうるのは、表象力によるといえる。

e) 間柄力

間柄は関係の社会的カテゴリーで(山根, 1987a)、それぞれの間柄は特定の心理的距離の範囲を期待・許容している。われわれは初対面に近い状況でも、特定の間柄の認識によって、特定の近しい表出行動が即座に可能、期待されるだけでなく、表象においても親密感が自然に発生される。たとえば、出産後初めて見るわが子やわが孫、外国人と結婚した親族のその姻族と

の初対面時など、「家族」という間柄の認識が、親密な行動を許容するだけでなく、家族としての愛情すら自然に湧いてくる。上述した旧友との再会でも、「同窓・同輩」という間柄の認識が、再会時の近しい表出を許容する。これは在学時に培った共在力にもよるが、在学時には距離が遠かった相手とも同窓会で親しく話せるなら、それはむしろ間柄力によるところが大きい。すなわち間柄力は、距離の社会的（先験的）規定要因であり、表象との構造的力とは別個の力として表出の適切さを規定している。この間柄力のおかげで、われわれは個々の努力で関係を1から構築しなくても、知人や友人を得ることが容易になっている。視点を変えれば、実現している距離は間柄の許容範囲内であり、その範囲を超えれば不適切な距離となり、間柄の変更か関係の再調整のどちらかの選択を迫られる。

2.4. 共同性の距離体験

以上から、共同性にかかわるのは、能動的距離、表象的距離、共在力、受容の魅力、間柄力となる。これらからも、能動表象は共同性そのものに最も近いといえる。

共在力が単独で共同性を高めることが可能なのは、自己の存在様式としての共存在性に由来するものといえよう。それは表象力によってもある程度可能となる。受容的魅力は能動的に同一化したという動因で共同性を高めるのに貢献する。間柄力は近い間柄の認識によって共同性を自動的に高めることができる。

一方、構造的力は、共同性への外力として作用する。すなわち今の共同性を不適切なものと感じさせる力がある。では構造的力がはたらく4側面において、共同性はどのように機能しているのか。能動表象は共同性にほとんど等しい一方、受動表象は他者側の共同性の推定であるから、自己の共同性からは最も離れている。ただし受動表出という“距離づけられ”体験は、心理的距離空間そのものが開かれる力をもっており、能動方向での共同性が反応させられる。このように共同性の空間は受動表出によって開かれる。受動表出が能動表象としての共同性をいかに開くのか。次にその過程を問題にしたい。

3. 表出距離の体験

心理的距離についてのこれまでの論考で、心理的距離＝共同性と焦点化し、共同性は能動表象にもっとも近いながら、その能動表象を可能にするのは表出とりわけ受動表出であることが示された。すなわち、対人関係は互いの表出によって開始されるのである。

特定の対人行動が心理的距離の表出行動となり、それが受動表出として、相手との間に距離を開く契機となり、またそれへの直接的応答として能動表出が、自己の自覚的制御を経ずして発現されるなら、表出距離は表象とは別の独自の距離空間をもっていることになる。同時に能動表象と照合されてズレの認識を与えるとすれば、その距離空間は表象と照合可能な共通性をもった距離空間でなくてはならない。すなわち対人行動に付随する表象的距離空間というものを想定しなくてはならない。

3.1. 記号性

表象距離は共同性そのものであり、それでしかないのに対し、表出距離は、対人行動と心理的距離（共同性）を併せもっている。すなわち、行動と心理的距離が記号として結びついたものである。記号は能記（signifiant）と所記（signifié）の結合であり、行動が能記、心理的距離が所記にあたる。記号＝|能記|所記|と表現されることから、これを表出距離に当てはめ

れば式④になる。

$$\text{表出距離} = | \text{行動} | \text{心理的距離 (共同性)} | \dots \text{④}$$

ただし、記号 (sign) というのは、言語のように非自然的 (文化的) 制度を指し、確かに文化によって距離値が異なる表出行動が存在するが、心理的距離の表出においては、他の動物と共通するあるいは生得的に備わっている自然的な信号 (signal) としても存在し、ここではこれも記号に含める。むしろ心理的距離においては表出行動 (非言語行動) の自然的信号性が記号性の根拠となる。これは最初から恣意的記号でしかない言語とは異なる。このように表出を記号として捉えるなら、能記の体系と所記の体系をそれぞれ別個に分析できる。そしてそれらの体系間の照合 (1対1対応) をするのが次の手順となる。

a) 能記の体系

ここで探究したい能記は、心理的距離を所記とする対人行動である。対人行動は形態的にはまず非言語行動と言語行動とに分けられる。非言語行動 (狭義の行動) ではどのような行動が記号として機能するのか。心理的距離の表現通り、対人間距離が最も基礎的といえる。そして近接域での対人接触も重要である。また、関心の対象を示す視線行動も重要であり、表情においては受容を意味する微笑が共同性に作用する特別な価値をもっている。非言語行動は起源的には生得的信号であるが、性別による効果の違いや文化的記号としての意味づけもあるため、所記 (距離値) とのつながりには性別や文化的変異を考慮に入れる必要がある。

言語行動は、まず“話しかけ”という対人的発話行動それ自体が心理的距離にかかわる。一方、言語表現の内容に関しては、個別の言語圏ごとに体系化せざるをえない。そしてメッセージの意味だけでなく、言い回しなどの語用論的変数も重要である。たとえば敬語 (丁寧語) は敬意だけでなく心理的距離と記号的に結びついている。また対人行動をこれら2つに分断するのではなく、これらの行動の複合的連鎖による社会行動 (行為)、たとえば食事や旅行など共同行為も能記の単位となる。

以上の対人行動は膨大な種類があるため、それらをすべて心理的距離との記号体系に取り入れることは不可能である。まずは心理的距離とのかかわりの程度で大きく分類する必要がある。

行動には、心理的距離 (共同性) にかかわらなくても、個別性にかかわるものがある。対人行動ではない自己表現行動は、それ自体で個別性 (その人らしさ) を高める。その個別性は魅力として距離 (共同性) を動かす力になる。

一方、対人行動は、ほとんどが心理的距離にかかわる行動とみなせる。そもそも心理的距離を含意している行動を本稿では「表出行動」としている。それらは、心理的距離を明示的に、すなわち距離を表現するために意図してなされる行動と、暗示 (含意) 的、すなわち距離の表現を意図したものではないが、特定の距離を読み取ることが可能な行動に分けることができる。前者に近いものとして、特定の問柄を記号的に意味する行動を「有標行動」 (marked behavior) と名付けている (山根, 1897a)。問柄は心理的距離の範囲を規範的に規定するものであるから、心理的距離を明示する行動もその問柄での可否にかかわるため、広義の有標行動といえる。それならまずはこの意味での有標行動を特定する必要がある。これまでに挙げた行動では、空間的距離、身体接触、正視、微笑、話しかけ、敬語、食事、旅行などである。

b) 所記の構造

心理的距離は共同性に限定しているので、1次元の空間とみなせる。それは最小値が自己 = 0で、最大値は「真他人」 (アカの他人) に相当する値の有限空間である。それゆえ比率尺度

的であるが、上述したように1という単位性や倍数性は想定しがたい。なぜなら、具体的な距離感である距離値は定性的というよりは値の境界が不明瞭で、定量的なものといえるが、視野の空間的距離感のように数値で表現できる距離値の推定が可能となるほど具体的ではないため、距離値を数量的に表現することは体験の再現とは言い難い。その意味では対人心理的距離感とは視覚的距離感より聴覚的距離感に近いともいえる。

能動表象も共同性という意味では同じ距離空間であるが、表出の所記と能動表象は体験としては同一ではない（山根、1995では同一としたが、それを改める）。ここで問題にするのは能記の対人行動に付随（対応）している所記としての心理的距離である。すなわち特定の対人行動において直感的に得られる距離値である。筆者はそれを「原表象」と名づけた（山根、2013）。したがって式④は④'に置き換えられる。

$$\text{表出距離} = |\text{行動}| \text{心理的距離（共同性）}| = |\text{行動}| \text{原表象}| \dots \text{④}'$$

c) 原表象と能動表象

原表象は、能動表象のように表出と分離して思念的に表象されるのではなく、表出の知覚表象（意味作用）として体験される。すなわち特定の行動の知覚に特定の距離が連合して表象される。その連合は生得的といえるものと社会文化的なものを含む。

原表象は表出に結びついており、受動方向においては表出が表象の直接の根拠となる。一方、能動方向においては、能動表出に意図的制御（演技など）が加わっている場合は、能動表象の直接の表出とはいえない。この直接性の点からも（距離空間の開闢に加えて）、原表象は受動表出においてこそ問題になる。

行動の認知とともにその意味として自動的に表象される原表象こそ、すなわち受動表出に備わる原表象こそ、最も直接的な心理的距離の体験である。実際、能動表象での心理的距離を回答させた場合、回答者は対象の受動表出を想起した。すなわち受動表出に伴う原表象が能動表象の根拠になっていた。

一方、能動表象は、過去に体験した個々の表出に伴う原表象群に対する、現在の時点の再表象であり、原表象（presentation）に対する再帰的表象（re-presentation）といえる（山根、2013）。表出と表象は体験様式が異なると上述したが、原表象と能動表象のそれは能記の直接性の違いであり、再帰表象は原表象によって喚起された感情の影響を受けている。また、非対面時での再帰表象の繰り返しによってなされる距離の変化（表象力）も原表象からの差を大きくする。そのような相違はあっても、原表象と能動表象とは距離表象としては同質であり、それゆえ原表象が能動表象の材料となりえ、また両者の照合が可能となる。したがって表象距離と表出距離の不一致である「ズレ」は、より正確には表象層と表出に伴う原表象との共同性における距離値の不一致体験である。受動表出による原表象と能動表象との不一致すなわち「不整合」が発生するのも、過去の受動表出に伴う原表象に準拠しながら、表象力などで能動表象が変化した場合がある（その他に、他者側の都合で前回と異なる原表象を与える表出がなされた場合もある）。

3.2. 等距離性

以上をふまえて、心理的距離における等距離性は何を意味し、どのように確認されるのか、すなわち何が等しいのかを考えてみる。

まず、客観的に分かりやすい順でいくと、複数の他者間の等距離性は、能動的にも受動的に

も表出行動が同じであれば成立する。たとえば、“えこひいき”をしないという目的で等距離性を保つには、他者間で表出行動を同じにすることで実現できる。他者間の等距離性（逆に言えばミゾの体験）も表出行動の同一性で成立する。もちろん、表出行動が異なっても所記の距離（原表象）が等しい場合もありうるが、異なる行動間の等距離性は経験的な確認が必要である。ただし間柄が異なると同じ行動でも距離値が異なる場合があるので、真の等距離性は原表象での共同性の度合いが等しいことを意味する。

次に、表象と表出の間の等距離性、いかにすればズレの認識はいかに可能か。これは上述したように、表出の所記の原表象と能動表象との距離値の一致になる。

4 側面での距離値が照合可能であることは、表出の能記（対人行動）と所記（原表象）が対応づけられ、その原表象と能動表象とが共同性の次元で照合可能であることが前提となる。これを客観的に再現可能にすることがモデルのシステム化への作業となる。すなわち、心理的距離（共同性）を尺度化する道である。

4. 尺度化への道

心理的距離を尺度化するには、共同性の空間の有意味化が必要であり、その空間内にさまざまな表象距離を布置することが必要である。以下の2段階の作業が考えられる。

4.1. 表象距離：共同性尺度

心理的距離値を客観化するには、まず1次元の距離空間を張る。その空間は共同性の逆数の拡がりである。

まずは最もマクロな、すなわちすべての他者を布置できる距離空間を考える。最も近い原点は自己、最も遠い点は共同性の最小点である。最遠点は、対人関係という文脈を前提にするなら、関係が成立していない「真他人」（アカの他人）を置く。したがって距離空間は自己から「真他人」までの有限なものとなる。ただし共同性（受容性）の度合いは定性的でもなく、また数量的でもない（数値として計測できない）ため、共同性だけでは距離空間の内部（開区間）を有意味化できない。

4.2. 有標行動の布置

そこで、基準となる他者を空間内に布置することで、距離空間の基準を相対的にでも有意味化したい。空間の両端に自己と「真他人」が置かれていることから、まずは「真他人」を含めて「面識度水準」（山根, 1987 b）を構成する、「真知人」、「知他人」、「周辺知人」がそれらの間（開区間）に布置されうる。ただ、これでは距離の開空間を3分割するだけで大雑把すぎる。

a) 間柄の布置

距離空間をより細分化するには、先験的に距離の範囲が確定している「間柄」を布置することで可能となる。ただし間柄は特定の距離値ではなく範囲であり、また間柄には個々の関係で実現される「仲」の水準差があるため、点ではなくその集合の幅として布置される。

間柄の種別は多様なため、すべてを網羅する必要はない。間柄でも心理的距離が間柄の存否を決定する私的間柄が適している。公的根拠が存在しない純粋な私的間柄は「友人」「恋人」に限られるが、特定の心理的距離の範囲が想定できる「家族」や「同僚」、「上司」、あるいは周辺知人としての「近所の人」や知他人としての「有名人」を入れてもよい。これらの間柄が自己と真他人に挟まれた開区間のどのあたりに布置されるか、これらを数直線上で回答させる。

そのデータから、区間上の分布を取り、(正規分布するものとして) 平均値の周囲を間柄の距離値とする。

b) 有標行動の布置

マクロな距離空間ができれば、次に間柄ごとの領域に注目したメソ(中間)レベルの距離空間を考える。すなわち、間柄と表出行動との照合をして、有標行動(明示的な表出行動)を確定する。それぞれの間柄に“ふさわしい、許容される、ふさわしくない”行動を調査によって探ることで、間柄ごとの有標行動が確定される。間柄がすでに距離区間上の位置を得ていることから、間柄ごとの有標行動の距離値もそれに対応できる(行動と距離値との1対1対応には至っていないが)。有標行動の候補には、まずは信号的な表出行動が入り、また食事、旅行などの記号的な表出行動を加える(更に、マイクロレベルの距離空間は自己と他者の境界領域を問題にする。これは自我境界の概念と関係するので別の機会に扱う)。

以上の作業によって共同性空間が心理学的に有意味化されるであろう。心理的距離はこのように表出と結びつくことで、空間内が有意味化された尺度になりうる。

引用文献

- 山根 一郎 (1987a). 「恋人」という間柄を意味する諸行為の記号学的分析 社会心理学研究, 2(2), 29-34.
- 山根 一郎 (1987b). 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 心理学研究, 57, 329-334.
- 山根 一郎 (1995). 対人心理的距離のモデル化 椋山女学園大学研究論集社会科学編, 26, 1-13.
- 山根 一郎 (2005). 私とあなたの心理的距離 青山社
- 山根 一郎 (2012). 心理的距離はどのような距離か 椋山女学園大学人間関係学研究, 10, 55-65.
- 山根 一郎 (2013). 心理的距離の動態 椋山女学園大学人間関係学研究, 11, 69-80.
- 山根 一郎 (2015). 心理的距離における能動表象—その現象学的接近— 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 46, 87-100.